

氏名	金 高 利 昌		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	博乙第 2010 号		
学 位 授 与 の 日 付	平成元年 6 月 30 日		
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）		
学 位 論 文 題 目	陳旧性小児上腕骨外顆骨折の治療に関する研究 —観血的整復術について—		
論 文 審 査 委 員	教授 寺本 滋	教授 折田薫三	教授 村上宅郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

陳旧性小児上腕骨外顆骨折は、Jakob の報告以来、手術すべきではないとされ、積極的に手術を勧める報告は少ない。さらにその長期術後成績の検討はされていない。

本骨折は骨端軟骨の損傷を伴うため、術後成績の評価には、長期観察が必要である。そこで、本研究では骨折後 4 週から 6 カ月経過して観血的整復術が施行され、すでに骨成長が終了した 15 症例の術後成績を検討し、本骨折に対する手術的治療の是非を検討した。

結果は、全例骨癒合良好で、著明な外反肘や遅発性尺骨神経麻痺の発生、日常生活動作の制限はなく、肘関節可動域制限は軽度であった。X 線上、外顆の変形は手術までの期間が長いほど、また術前の骨片の転位度が大きいほど、強くなる傾向が認められ、外顆に高度な変形を示した症例は 3 例のみであった。

以上より、陳旧性の小児上腕骨外顆骨折に対し受傷後 6 カ月までは積極的に手術してよいと考える。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は陳旧性上腕骨外顆骨折の治療に関する臨床的研究であって、骨折後 4 週より 6 カ月を経て観血的整復術を施行された症例について 4 年 11 月より 18 年 1 月の追跡により検討した結果、積極的に手術してよいことを立証したものであって、価値ある業績であると認める。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。